

## 各種委員會報告

## 令和三年度 薬学部 FD 活動報告

徳本真紀、井上 誠、古野忠秀、武井佳史、兒玉大介、安藤基純、神野伸一郎、  
佐藤雅彦、安池修之、村木克彦、鍋倉智裕（委員長）

愛知学院大学薬学部・薬学研究科 FD・SD 委員会

令和 3 年度薬学部 FD 活動として、第 1 回講演会（「化学物質の法規制と薬品管理システムを活用した安全管理」関東化学（株）岩上淳氏、令和 3 年 11 月 4 日）、第 2 回講演会（「関わりの難しい学生へのアプローチ—予防的観点から—」愛知学院大学心身科学部心理学科牧田潔教授、かけい臨床心理相談室掛井一徳室長、令和 4 年 2 月 10 日）、第 1 回 FD・SD ワークショップ（「合理的配慮を中心とした初年次におけるメンタルヘルスケア —学修に課題を抱える学生の早期発見・早期対応を考える—」令和 4 年 2 月 25 日）、第 2 回 FD・SD ワークショップ（「4 月から始める学力向上対策—国試ストレート合格率 7 割を実現するための具体的な対策とは？—」、令和 4 年 3 月 11 日）を実施した。研究授業は初めての試みとして、秋学期開講科目のうち薬学部教員が主に担当する全講義を対象に、録画講義のオンデマンド視聴によるアンケートを実施した。

### 研究授業

令和 3 年 12 月 24 日～令和 4 年 1 月 31 日に、薬学部教員が主に担当する全ての秋学期開講科目を対象に研究授業を行なった。対象となった科目から、それぞれ 1 回分の講義動画を Microsoft Stream にアップロード後、Teams「薬学部会議」において共有し、上記期間においてオンデマンド形式によって視聴した。視聴した教員に対し、講義内容やスライドに関するアンケートを実施した。アンケート回答件数 44 件、アンケート回答者数 40 名（回答率 83.3%）、講義 1 科目あたりの回答数は平均 2.1 件であった。

### 講演会

第 1 回講演会は、関東化学（株）の岩上淳氏に、「化学物質の法規制と薬品管理システムを活用した安全管理」というタイトルで講演をお願いした。本講演会は、令和 3 年 11 月 4 日に Teams によるオンラインにより実施し、化学物質の法規制への理解を深めるために、有害性化学物質の基礎知識や規制基準、事故防止対策、薬品管理支援システムに関する情報を提供いただき、化学安全についての知識の習得を目的とした。薬学部教員 44 名、職員 2 名、

大学院生 2 名、学生 11 名が参加した。（共催：薬学部危険物委員会）

第 2 回講演会は、愛知学院大学 心身科学部 心理学科 教授の牧田潔先生、およびかけい臨床心理相談室 室長（心理臨床センター 前特任講師）の掛井一徳先生に、「関わりの難しい学生へのアプローチ —予防的観点から—」というタイトルで講演をお願いした。本講演会は、令和 4 年 2 月 10 日に Teams によるオンラインにより実施し、気になる学生や配慮が必要な学生への対応を考えるきっかけとして、メンタルヘルスケア・カウンセリング・臨床コミュニケーションの専門家の立場から、具体的な例を交えて話題提供いただいた。本学教員 170 名、事務職員 4 名、学生 1 名、その他 1 名の出席があった。なお、この内薬学部からの参加は、教員 42 名、職員 2 名であった。（共催：歯学部・歯学研究科 FD 委員会、短期大学部）

### 第 1 回ワークショップ

「合理的配慮を中心とした初年次におけるメンタルヘルスケア —学修に課題を抱える学生の早期発見・早期対応を考える—」

第 1 回ワークショップは、「合理的配慮を中心とした初年次におけるメンタルヘルスケア —学修に課題を抱える学生の早期発見・早期対応を考える—」をテーマに、令和 4 年 2 月 25 日に Teams によるオンラインにて行った。薬学部教職員 55 名（教員 50 名、事務職員 5 名）、短期大学部歯科衛生学科教員 12 名が参加した。

「学習に課題を抱えている学生を初年次の早い段階で把握し、合理的配慮の意義を理解して、教職が連携して、どのように対応していくか検討する」ことを目的として、以下の 5 点を目標にグループワークを行った。

<目標>

- ① 薬学部の初年次における学生の学修状況を理解する。
- ② 障がいを持つ学生への「合理的配慮」について理解する。
- ③ 教員としてどのように対応するかを検討する。

- ④ 職員としてどのように対応するかを検討する。
- ⑤ 教職連携してどのように対応するかを検討する。

13 グループ(4-6名/1グループ)に分かれて、「学生の学修状況を把握する」、「合理的配慮を指導に活かす」、および「教職連携で進める学生支援」について議論を行い、まとめとリフレクションシートを作成した。

グループワークの合間には大正大学の成田秀夫教授から「障がいをもつ学生への合理的配慮とは」および「学修データを学生指導に活かす」と題した講義を受けた。



**①学生の学修状況をいつ・だれが・どのように把握し共有するか？**

- ・早期に対応するという観点からは、1年次に教養部との情報共有が必要。e-ポートフォリオを活用し、主としてアドバイザーが把握。薬学部事務も見られるように。
- ・新学期に対応が必要な学生を共有する
- ・定期的に配慮が必要な学生の情報を共有する機会を作る
- ・講義の出席状況（同学年の他の先生の講義）を早期の段階で把握できるようにする。
- アラートのような連絡体制を作る
- ・専任教員を配置する
- ・アドバイザーが把握するが1年生は教養部の先生がメイン。
- ・春学期、秋学期の成績が出る前に出席を把握できるとよい
- ・中間試験も場所がない・・・
- ・心身および学習意欲を測るアンケートを実施する。

・教員全員で把握する体制を確立することが今後の課題。

- ・入学希望者に診断テストのようなものをアンケートのような形で受けてもらう（早期発見・職員間で共有←データの取り扱いが難しい？）+教養科目の結果などと合わせて判断する。
- ・アドバイザー面談でできる限り把握するように務める（もしくは専門家に依頼？）
- ・e-ポートフォリオで職員間や専門職員（可能であれば）と共有（情報流出などの問題）

**②授業時・授業内での対応をどのようにするか？**

- ・緊急時の対応をマニュアル化しておく。
- ・体調変化に合わせて、講義を対面・オンラインで対応できるようにする。
- ・学生・家族の要望になるべく沿う形で授業を実施。
- ・欠席日数を把握することで問題学生を把握する
- ・全体の出席率を示してもらえると問題学生のあぶり出しが可能
- ・事務室の職員と情報を共有し、対応をお願いする
- ・現在のところ、想定自体されていないので、システムを決めておく必要がある。

**③授業外での対応をどうするか？**

- ・オンラインを活用してコミュニケーションをとる体制を整える。（チャット相談の時間制限）
- ・プライベートの線引きをはっきりする必要。
- ・授業外での対応についてはチャットで行う等を周知しておく
- （課題）学生側のアドバイザー面談への理解・信頼感の醸成が難しい。
- ・講義の一コマとして、面談する機会があると学生も来やすいのでは（講義時間外で対応しているのでは）
- ・飲み会などで状況を把握する
- ・ある大学では先生の部屋にいつ来てもよい
- ・もう少し学生と教員の垣根をとってもよいのでは
- ・先輩と後輩の接点
- ・大学主催のイベントが少ないのでイベントで学生同士の交流を持たせてもよいのでは
- ・運動させる。
- ・保護者との情報共有。
- ・面談の回数を増やす

## 第2回ワークショップ

「4月から始める学力向上対策—国試ストレート合格率7割を実現するための具体的な対策とは?—」

第2回ワークショップは、「4月から始める学力向上対策—国試ストレート合格率7割を実現するための具体的な対策とは?—」をテーマに、対面およびTeamsによるオンラインにて令和4年3月11日に実施した。薬学部教職員47名(教員44名、事務職員3名)が参加した。

「国試ストレート合格率70%達成に向けて、6年間の学士課程教育における教育の質を確実に担保すると同時に、新入生の基礎学力を向上させるための具体的な方策を考え、確実に実施できる体制を整える。」ことを目的として、以下の3点を目標にグループワークを行った。

<目標>

- ① 学士教育の質保証を確実に行うための方策を検討する。
- ② 22年度入学生の基礎学力を向上させるための方策を確定する。
- ③ ワークショップで検討したことを確実に実施するための体制を整える。

初めに大正大学の成田秀夫教授から「第1回ワークショップのふり返し」および「学生の意欲を高め、学びを進めるために」と題した講義をしていただいた後、9グループ(5,6名名/1グループ)に分かれて、「4月から始める学力向上策」、「具体策の共有」について話し合い、リフレクションシートを作成した。

### ①そもそも学修意欲に乏しい

#### ■想定される原因(多様性あり)と対策例

- 不本意入学 ⇒ 仲間作り、先輩からアドバイス
- キャリア意識不足 ⇒ 早期発見・学修相談
- 家庭・経済環境 ⇒ 学生支援



#### ■早期発見、早期対応が鍵

### ②読み・書き・計算の基礎学力が十分ではない

#### ■想定される原因(多様性あり)と対策例

- 読み・書き ⇒ 初年次アカデミックスキル科目
- 計算力 ⇒ フォローアップ講座
- LD・学習障がいなど ⇒ 学生支援の活用



#### ■学士課程とは別の対応が必要(入学前教育の活用も)

### ③専門教育の前提となる高校時代の学習が不十分である

#### ■想定される原因(多様性あり)と対策例

- 理科学分野 ⇒ 授業の中で補足する/別枠で補足する



#### ■リメディアル教育で対応(入学前教育の活用も)

#### ■学生同士の学び合いを活用する

### ④専門教育の内容が理解・定着できない

#### ■想定される原因(多様性あり)と対策例

- 内容が難しい ⇒ スモールステップ&即時フィードバック
- 量が多い ⇒ カリキュラムの見直し
- 授業外学修が不十分 ⇒ 時間割などの見直し



#### ■カリキュラムや時間割などの最適化

### ⑤国家試験対策の勉強が不十分である

#### ■想定される原因(多様性あり)と対策例

- 学習時間が足りない ⇒ 大学で学習する時間を確保する
- 自習できない ⇒ 学生同士の勉強会を実施する
- 意欲が湧かない ⇒ 先輩薬剤師などの話を聞く



#### ■学習時間の確・学生が集団として学習する雰囲気作り

### ①学生の学修上の問題点を把握する

- ・基礎学力がない
- ・スケジュール管理ができない
- ・自己管理ができない(朝起きられないなど生活態度にも問題)
- ・オンラインだとやる気が出ない
- ・勉強についていけないことに危機感がない
- ・勉強の方法がわからない、方法が間違っている
- ・自分を過大評価しがち
- ・理解できていない学習内容を放置、あとに持ち越す
- ・反応がない
- ・情報収集する意思がない、情報を処理する理解力がない
- ・全て受け身の姿勢
- ・大学側からの連絡が届かない

## ②問題点を観点別にまとめる

観点	問題点
学生の 資質	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分を過大評価しがち</li> <li>反応がない（性格の問題）</li> <li>スケジュール管理ができない</li> <li>主体性がない</li> </ul>
学生の 積極性	<ul style="list-style-type: none"> <li>オンラインだとやる気が出ない</li> <li>全て受け身の姿勢</li> <li>部活やサークルには熱心だが学修に対して興味がない</li> </ul>
学修支 援	<ul style="list-style-type: none"> <li>基礎学力がない</li> <li>勉強の方法がわからない、方法が間違っている</li> <li>理解できていない学習内容を放置、あとに持ち越す</li> <li>わからないことがわからないということにすら気づけない</li> </ul>
学生支 援	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己管理ができない（朝起きられないなど生活態度にも問題）</li> <li>勉強についていけないことに危機感がない</li> <li>反応がない</li> <li>情報収集する意思がない、情報を処理する理解力がない</li> <li>大学側からの連絡が届かない</li> </ul>

## ③具体的で実行可能な解決策をつくる

1年次の対策	<ul style="list-style-type: none"> <li>オリエンテーション等で対応する教職員が学生情報を収集し、全教職員で共有する</li> <li>その情報は事実のみでもOK（欠席が多い、提出物が出ない、説明しても伝わりにくい、など）</li> <li>そこでピックアップした学生に対して特にフォローする →理解度の悪い学生（言葉だけで理解できない学生）には紙に書いて渡す、など</li> <li>アドバイザーの教員に積極的に関わってもらう</li> <li>楠元に来る日を増やす（現在週2をそれ以上にする）</li> <li>ある程度教員側で学習スケジュールを管理する</li> <li>縦割りのワークショップを開催する →卒業生にも協力してもらう</li> </ul>
2年次以降の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>国試に必要な考える力を実務実習中にもっと伸ばせるよう、基礎と臨床を結びつける</li> </ul>

ような講義を4年生までに増やすとよいと思う

・ワークショップ終了後、リフレクションシートには、次のようなリフレクションがあった（抜粋）。

### ① 本研修の成果について

- ・ 実務系教員は本格的に学生に関わるのは3年の後期からであるため、初年次の問題点というものがどこにあるのか分かり難かったが、今回の研修で初年次教育の問題点が分かった。また、講義内容や演習・実習内容の具体的な取り組みに関する報告がほとんどなかったのは残念だが、それ以外のところでも課題が多く取り組んでいく必要があると考えられた。
- ・ 4月から始める新1年生に対する対策が、多様な視点から出された。
- ・ 自学のカリキュラム・講義・学生における、問題点や現状について認識するよい機会となりました。
- ・ 現状の課題や、解決策が非常に具体化してわかりやすかった。
- ・ 今後、どのようなことが実践できるかについて考える非常にいい機会になった。

### ② 本研修を踏まえ、4月から自分が実践すること

- ・ これまでも、早期体験学習、IPE、医療薬学実習Ⅲなど臨床に関わる実践的な内容を毎年取り入れて対応している。今年度はIPEとして愛知県立総合看護専門学校との連携、医療薬学実習Ⅲでは検体検査などの新しい分野について行っていく。また、病院施設と連携しながら卒業研究やpost clinical clerkshipの実施や低学年での実践でのIPEの実施にも取り組んでいく。
- ・ 学年担当として、学生情報の共有の仕方について薬学部事務室と協議する。
- ・ アドバイザー学生とのなるべく早い面談
- ・ 学力下位層が、理解できるような講義内容になるよう、授業構成と資料の見直しをする。
- ・ 授業にできるだけ、演習を取り入れる。
- ・ まずは、実習などの班分けを名簿で機械的に分けるのではなく、なるべく様々な人と触れ合えるように授業ごとで変える。
- ・ 授業内で、スモールステップになるような問題演習を行う。
- ・ 講義・実習・演習を担当する中で、要支援学生を早期発見できるような工夫をしていきたい。

- ・ アドバイザー学生（特に 1 年生）と早い段階で話し、問題がある場合は早目に対処できるようにしていきたい。

### 【総括】

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、講演会と第 1 回ワークショップはいずれも Teams によるオンラインにて実施したが、それぞれに多くの教職員が積極的に参加した。第 2 回ワークショップではグループワークを対面とオンラインの併用で行ったが、円滑に進めることができた。研究授業は Stream と Teams を使用したオンデマンド視聴によるアンケートという初めての試みであったが、積極的な参加がみられ、例年以上のコメントを得ることができた。今回の方法によって春学期の開講科目を対象にした研究授業の実施を期待する声や、実施時期や講義回を限定せずに、日常的に、全員が全ての科目を視聴できるようにしてはどうか、という意見も寄せられた。地域貢献活動において、生涯学習への参画は例年通りであり、本年度も多くの参加者に対して講演を行うことができた。

これらの取組みを通じて、薬学部 FD・SD 委員会では引き続き、薬学部の全入学生に対して、多様な視点から高度な医療人専門教育を推進するサポートを進めていくことと同時に、広く地域社会への学術貢献をしていくことを全教職員の共通認識として推進していきたい。